

いじめ防止と道徳科の重点指導項目に関する調査研究 —小学校教員の意識を中心に—

田中 健一 水野 正幸 加藤 秀男 鉤 治雄

1 問題と目的

今日いじめ問題は依然として学校教育における最重要課題のひとつであり、特に近年のいじめ問題は低年齢化の傾向にあり、小学校でも児童間のいじめが大きな問題となっている。

そうした中で、小中学校の新学習指導要領では新たに「特別の教科 道徳」の設置が明示されることになった。文部科学省は小学校において2018年度（平成30年度）から完全実施となった「特別の教科 道徳」に対して、いじめ問題解消への重要な手立てとして大きな期待を寄せている。その上でいじめの問題への対応を一層充実したものにするために、授業内容も児童生徒の発達段階を踏まえた体系的なものにし、内容の改善や問題解決的な学習や体験的な学習を取り入れるなどの工夫を図ることを強調している¹⁾。こうした指摘はいじめ問題への対応に関して、とりわけ道徳教育に対してより実効性のある教育を求めていることのあらわれであるといえる。

既に文部科学省は全国の小中高等学校等において、2016年度のいじめの認知件数は過去最多の32万3808件に及んでいることに言及している。2016年度のいじめの認知件数は、前年度と比べて9万8676件も増加したことになる。

このようないじめの認知件数の増加の背景には、2017年3月に同省が「けんか」や「ふざけ合い」もいじめと捉えるように方針を改めたことが大きく関係している。こうした背景をふまえて、学校現場は積極的にいじめを認知するにいたり、件数の増加につながったと考えられる。中でも小学校におけるいじめの認知件数は23万7921件となっており、前年度と比較して8万6229件も増加している。小学校におけるいじめの認知件数の増加は、中学校の1万1309件、高等学校の210件の増加数と比較してみても、きわめて高い数値となっている²⁾。

「けんか」や「ふざけ」といった行為は、いわば小学生に特徴的な行動特性でもあることから、小学校におけるいじめの認知件数が増加傾向にあるのは、ある意味で当然の帰結であるといえる。しかし、この数値からは広義の意味でのいじめの実態をうかがい知ることができるという点では、今後のいじめの対応に向けての重要な資料であることに違いない。

その一方で、より重視すべき点として「いじめ防止対策推進法」で定める被害者の生命や身体の安全が脅かされるなどの「重大事態」が、小中高全体で400件以上にのぼっていることである。これらの数値はあらためていじめ問題の根深さをあらわしているといえよう³⁾。

いじめ問題への予防と対応に向けて、これまで「道徳」の時間はどのような役割を果たしてきたのであろうか。

従来の「道徳」の時間が、正式に教育課程の中に位置づけられたのは、1958年（昭和33年）の小中学校の学習指導要領においてのことである。この年、一例として、小学校教育課程では、①「各教科」（国・社・算・理・音・図・家・体）、②「道徳」（週1時間配当）、③「特別教育活動」（児童会活動、学級会活動、クラブ活動）、④「学校行事等」（儀式・学芸的行事、学校給食等）の4領域が正式に位置づけられ、今日の教育課程の基盤が作られた⁴⁾。

しかしながら、半世紀以上を経た今日においても、児童生徒の学力向上に社会の期待が集中し、各教科にかかわる教育内容が重視され、教科への比重が高まる一方で、週1時間配当の「道徳」の時間や今日の「特別活動」の時間は、常に軽視される傾向にあった。こうした背景の中で、これからの「道徳教育」をより一層充実したものにし、いじめ問題への対処を可能にしていくためには、大要、以下の3点の課題を克服していくことが求められる。

第1は、既に述べてきたように、教科教育偏重の教育課程にあって、人格形成や学校、学級の生活基盤としての道徳や特別活動のもつ意義について、何よりも社会や学校関係者の意識を高め、心豊かな人間関係に根ざした学校生活づくりを目指していくことである。

第2に、従来の「道徳」の時間における授業内容や展開の面での課題があげられる。これまでの道徳の授業の課題のひとつは、ともすれば教材の心情理解のみに偏った形式的な指導に陥っていたことにある。児童生徒に教師が望ましいと考える紋切型の答えを要求したり、記述させる授業が中心になるあまり、授業の進め方や内容そのものが単調になり、創意工夫に欠ける傾向がみられた⁵⁾。

第3に、今後は「道徳」の授業とその他の教科、とりわけ、「特別活動」との連携を視野に入れた取組が求められるということである。「道徳」を通して得られた知識や学習内容を、学校生活や家庭生活の中で、どのように具体的な行動や実践へと移行し、結実できるかということが大きく問われている。

そうした意味では、道徳教育の中核をなす「特別の教科 道徳」の授業内容の新たな取組みと展開が強く求められている。今回の新学習指導要領において、これまでの「道徳」の時間が、一歩踏み込むかたちで制度上「特別の教科 道徳」として教科化されたことは、戦後の教育課程の変遷からみてきわめて大きな意義があるといつてよい。「道徳」の教科化の背景には、既に見てきたように、いじめ問題に象徴される児

童生徒の倫理観や道徳心の欠如、人間関係の希薄化といった問題が潜んでいる。

これからの道徳教育を充実したものにし、児童生徒関係の歪みの象徴としてのいじめ問題への対応を可能にしていくためには、とりわけ、道徳教育の中核をなす「特別の教科 道徳」の意義や内容、展開の仕方について検討し、理解を深めることを通して、その役割と責任を明確にしていく必要がある。

そこで、本研究では、道徳教育の中核としての「特別の教科 道徳」の指導内容、中でも学習指導要領で明示されている「道徳」の重点指導項目に着目する。その上で、「特別の教科 道徳」が、いじめ問題への解消のための重要な手立てとなるためには、まず授業の体現者である教師自身が、これらの重点指導項目のどこに着目し、重視しているのかを明らかにしていく必要がある。その理由は、教師自身のいじめに対する認識や道徳観が、「道徳」の授業目標や内容、構成に及ぼす影響がきわめて大きいと考えられるからである。

既に文部科学省は、「特別の教科 道徳」の授業に際して計 22 の内容項目を挙げている⁶⁾。このうち、今回の小学校学習指導要領の一部改正に伴い、いじめ問題への対応等の観点から、小学校第 1 学年から第 6 学年の重点項目として、新たに内容項目を追加している⁷⁾。

具体的には、小学校第 1 学年及び第 2 学年で「個性の伸長」「公正、公平・社会正義」「国際理解、国際親善」、第 3 学年及び第 4 学年で「相互理解、寛容」「公正、公平・社会正義」、第 5 学年及び第 6 学年で「よりよく生きる喜び」の重点項目を新たに追加した⁸⁾。小学校の教育課程では、これらの重点項目をふまえて、児童の発達段階を考慮しつつ、よりよい授業改善に資するとともに、実効性のある道徳教育の推進を図ることが期待されることとなった。

「特別の教科 道徳」(道徳科)で重視している内容項目の検討の中で、とりわけ「いじめ」に係る記述があるのは、次の 2 項目であると考えられる。

1 つ目が「相互理解、寛容」⁹⁾である。この内容項目では、いじめを生まない雰囲気や理念を醸成するとともに、互いの違いを認め合う理解や他者を尊重する態度が期待されている。つまり、価値理解を通して他者理解、自己理解を深めることが求められている。

2 つ目は「公正、公平、社会正義」¹⁰⁾である。ここでは、差別や偏見の心を持つという人間の本性や弱さに積極的に立ち向かい、公正、公平な判断力を育み、正義とは何かについて考え、自覚を新たにしていくことが求められている。こうした視点は、いじめ問題に対処していく上で、きわめて重要な視点であると考えられる。いじめを抑止していく上では、こうした 2 つの内容項目はもとより、「特別の教科 道徳」で示された全 22 の内容項目が、道徳科の授業だけにとどまらず、児童の日常生活に生かされることが重要である。

ところで、「特別の教科 道徳」の実施に伴い、検定教科書を使用することになっ

たが、平成30年度から使用されている道徳科の教科書の発行元（教科書会社）全8社が取り上げた、「いじめ防止に関する内容を扱った教材内容」に関する内容項目は以下のとおりである¹¹⁾。小学校において、それぞれの内容項目が全8社中、何社で取り上げられているかを上位から順に示すと、以下のようになる。

（1）小学校低学年で取り上げた教材の内容項目

「善悪の判断、自律、自由と責任」8社、「親切、思いやり」「公正、公平・社会正義」4社、「友情、信頼」3社、「節度、節制」2社、「生命の尊さ」「個性の伸長」「希望と勇気」「努力と強い意志」1社。

（2）小学校中学年で取り上げた教材の内容項目

「信頼、友情」8社、「公正、公平・社会正義」6社、「個性の伸長」「善悪の判断、自律、自由と責任」4社、「相互理解、寛容」「よりよい学校生活、集団生活の充実」3社、「規則の尊重」「正直、誠実」1社。

（3）小学校高学年で取り上げた教材の内容項目

「公正、公平・社会正義」8社、「善悪の判断、自律、自由と責任」5社、「友情、信頼」「相互理解、寛容」3社、「親切、思いやり」「個性の伸長」「生命の尊さ」「規則の尊重」2社、「礼儀」「勤労、公共の精神」1社。

低学年の新しい「道徳」の教科書では、「善悪の判断、自律、自由と責任」「親切、思いやり」「公正、公平・社会正義」が上位を占め、中学年では「信頼、友情」「公正、公平・社会正義」が上位を占め、高学年では「公正、公平・社会正義」「善悪の判断、自律、自由と責任」が上位を占めていることがわかる。また、低中高学年に共通の内容項目は、「公正、公平・社会正義」であった。

以上のことから、低学年では「自分の好き嫌いとらわれないで接すること」、中学年では「誰に対しても分け隔てをせず、公正、公平な態度で接すること」、高学年では「誰に対しても差別をすることや偏見をもつことなく、公正、公平な態度で接し、正義の実現につとめること」を指導目標として、計画的、発展的に指導するとともに、「生命の尊さ」や「善悪の判断、自律、自由と責任」「友情、信頼」「相互理解、寛容」などの指導内容との関連を図りながら、指導をすすめる必要があることがわかる。

さらに、これまでの小学校教員の「道徳」における幾つかの具体的な授業実践事例では、どのような内容項目を意識して、道徳の授業を展開しているのだろうか。ちなみに、「特集『いじめ』を乗り越える道徳授業づくり」¹²⁾で取り上げられた授業実践に関する記事や指導案、授業記録をみると、以下の計10の内容項目をもとに、授業が行われていることがわかる（一部、内容項目の記述のないものについては、記述された内容から筆者らが判断した）。

「道徳の時間を中心に（執筆者：田村直美）」（内容項目：「誠実」）、「親子愛を通して生命尊重の道徳教材（執筆者：増尾敏彦）」（内容項目：「生命の尊さ」）、「道徳で学ぶ仲間意識（執筆者：井上貴子）」（内容項目：「友情、信頼」）、「なんとなくではなく、

しっかり分かり合える友達になろう（授業者：中里真一）」（内容項目：「友情、信頼」）、
「自作資料でいじめの構造を考えて（執筆者：若山大輔）」（内容項目：「公正、公平・
社会正義」）、「いじめの見方がこの二冊で変わる（執筆者：高田保彦）」（内容項目：「公
正、公平・社会正義」）、「中学年の『思いやり』の資料を高学年で（執筆者：本郷一毅）」
（内容項目：「親切、思いやり」）、「小さな勇気が大きな勇気に（執筆者：渡辺由美子）」
（内容項目：「善悪の判断、勇気」）、「見方を変えたら味方がふえる～だから～（授業者：
勝又明幸）」（内容項目：「才能、努力」）、「心の叫びが聞こえますか（授業者：土田暢
也）」（内容項目：「勇気」）。

こうした実践事例は、いずれも「道徳」の授業を通して、いじめ防止に対する改善
工夫がうかがい知れる貴重な教育実践であり、各授業実践が、それぞれ異なった内容
項目をふまえて展開されていることがわかる。

しかしながら、これらの一連の教材はいずれも新しい教科書で取り上げられている
いじめの内容や、一部のいじめにかかわる授業実践内容と「道徳」の内容項目との関
連についてみたものであり、教師自身の意識や考え方についてみたものではない。そ
の意味では、授業の担い手である教師自身の意識に目を向け、いじめ対応との関連に
おいて、「特別の教科 道徳」の重点内容項目のどの点を強く意識し、注目して授業
を展開しようとしているのかを明らかにすることは、これからの道徳教育のあり方を
考える上で、きわめて重要となるであろう。

そこで本研究では、いじめの抑止に向けて、「特別の教科 道徳」の授業を実施す
る際に重視すべき内容項目に関する教師の意識について、小学校教員を対象に調査的
検討をおこなう。

2 方 法

（１）調査内容：

１）調査Ⅰ：「平成 30 年度から完全実施される道徳科の授業で、特に重視すべき内
容項目は何だと思われますか。学習指導要領で示された 22 の内容項目
は、それぞれ相互に関連し合う内容ですが、とりわけ、いじめ防止に
関連して重要であると考えられる項目を 7 つ選び、重視すべき順に
1 ～ 7 の番号を付けてください」との指示のもとに、22 の内容項目
の中から 7 つの内容項目を選択させた。

２）調査Ⅱ：調査Ⅰで、いじめ防止に関連して、道徳科の授業で重視すべき内容項
目を 7 つ選んだ理由について、自由記述で回答を求めた。

（２）調査期日：2016 年（平成 28）年 10 月

（３）調査対象：東京都 W 市内の計 20 校に勤務する小学校教員 246 人（男性 116 人、
女性 130 人）

年齢別内訳は、20代（男性24人 女性45人）、30代（男性45人 女性33人）、40代（男性21人 女性28人）、50代（男性23人 女性21人）、60代（男性3人 女性3人）であった。

W市は東京西部に位置する中核都市である。2014（平成26）年6月には、W市いじめ防止基本方針が策定されている。また「平成29年度 学校教育指針」の中で、健全育成の推進において「いじめの防止」を位置づけ、「子どものいじめ防止条例」「子どものいじめ防止基本方針」及び「学校いじめ防止基本方針」に基づき、道德教育と人権教育の充実に努めている。

（4）分析方法：本研究では、上記の2）調査Ⅱで得られた自由記述の内容を、KJ法で分析し、いじめ防止に関連して、小学校教員が道德科の授業で重視すべき内容項目を選択した理由を整理し、検討した。

3 結 果

自由記述欄において、「いじめ防止について道德科の授業で重視すべき内容項目7項目を選んだ理由」について、分析し、整理をおこなった。分析方法については、KJ法（川喜田，1970）を参考にして、分類・カテゴリー化を行った¹³⁾。分類・分析をおこなう際には、著者3名で実施した。なお、「内容項目を選んだ理由」についての分析であることから、明確に理由や根拠が記載されている回答のみを分析の対象とした。

分析の結果、年代や性別による差異が認められた。なお分類に際しては、道德科の内容項目にみられる道德性を、大きく「父性性」と「母性性」の2つの観点に分類・整理することで検討をおこなった（図1～10）。

（1）父性性としての「生命の尊厳」の重視

今回の分析から見てきた小学校教員の意識の特徴の1つは、まず第一に、父性性の面では、「D.生命の尊厳」が、いじめ抑止との関連の上で重視されていることであろう。父性性としての「D.生命の尊厳」を重視する傾向は、30代、40代男性教員と20代、30代、50代女性教員でいずれも顕著に認められる。

たとえば、20代女性教員では、「生命が一番大切なものだから」「相手や自分の尊厳を大切にすること」「生命より大切なものはない」、30代男性教員では、「生死に関する感覚が児童に大きな開きがある」「命を尊ぶことはすべての価値項目につながる」、30代女性教員では、「仲良くすることや相手の命を大事にすることは最重要」「命の尊さを知れば、自分自身を大切にすることが大きくなる」「命の尊さがわかれば、生命を軽視しない」「自分の命はもちろん、他人の命の大切さを感じとらせたい」などの記述が認められた。同様に、40代女性教員でも、「命の大切さを伝えたい」「生

命を尊重してほしい」「命の大切さや誰もが平等であることを伝えたい」、50代男性教員では、「命の尊さは大前提」の記述がみられた。

大半の教員は、男女を問わず、一貫して、「特別の教科 道徳」の授業実施に際して、いじめが自殺という最悪の結果をも招きかねないという事態をふまえて、「D. 生命の尊厳」要因を最も重視したと考えられる。本稿では、「D. 生命の尊厳」項目を父性性に分類したが、心理学でいう「父性性」には、「物事を判断する」「厳しく鍛える」「(悪を) 断つ」「(悪を) 切断する」「正邪を区分する」といった意味が含まれている。そうした点では、「D. 生命の尊厳」が選択された背後には、「かけがえのない生命を断じて守り抜く」「命の大切さを誰よりも強く心に刻み込む」ことのできる、生命力に溢れる児童を育てたいという教師自身の父性的な意思を感じ取ることができる。多くの教員がいじめ問題に対処していく上で、道徳科の授業で何よりもかけがえのない「生命の大切さ」を重視している点は、きわめて示唆に富むといえよう。

既に述べてきたように、筆者らはいじめを抑止していく上で、「道徳科」の授業の重点項目として、「相互理解、寛容」と「公正、公平、社会正義」の2つが、とりわけ重要であることに言及したが、今回の調査で得られた小学校教員の「D. 生命の尊厳」重視の傾向は、児童が「いじめは絶対に悪いこと」「かけがえのない命は、何にも増して大切にしなければならない」ということを実感し、子どもたちが相互に共有できる「道徳科」の授業を目指す必要があるとしている点では、「公正、公平、社会正義」の中の、「社会正義」という視点とも深く関連すると考えられる。

(2) 母性性としての「他者との関わり」、「他者への思いやり」の重視

今回の分析から見えてきた今一つの特徴は、多くの教員が重視する項目として、母性性としての「他者との関わり」、「他者への思いやり」、そして「自尊感情」「自己肯定感」をあげることができる。

まず「他者とのかかわり」では、20代男性教員で「コミュニケーション能力が低い児童が増えているから」「規律を守り、友だちとの距離感をある程度保つことを伝える」「人とかかわりの中に人の生き方があるから」などの声が寄せられ、30代女性教員では、「人と人が関わりあって生きていくことの大切を教える」「子ども同士のかかわりが、学校生活では主になるから」という指摘がなされた。また、50代男性教員からは、「人とかかわり合う力が育っていない子どもたちが多い」などの意見が出された。

結果では、「他者とのかかわり」と深く関連する今ひとつの要因として、「他者への思いやり」を指摘することができる。本研究では、「他者への思いやり」と共に、「他者受容」が「他者とのかかわり」の中の一つの重要な側面であることが指摘された。

この「他者への思いやり」について、20代女性教員では、「相手を思う態度は言葉としてあらわれる」「自分と人、どちらも同じように大切にすることを学ぶ」などの意

見が寄せられた。とりわけ、50代教員では男女共に、他者を思いやる「道德」の授業の必要性が示唆された。具体的には、「相手の気持ちになって考える想像力を培う」「今の子どもは相手への思いやりが欠如している」「自分のことだけで汲々としている」といった指摘がなされた。

母性原理の特徴は、「いたわる」「包み込む」「抱きかかえる」「養い育てる」という点にあるが、今回の結果を通して、多くの教員が年齢を問わず、いじめ問題を克服していくための重要な手立てとして、他者愛や愛他心を育む授業を「道德科」に求めていることがわかる。

さて今回の結果では、多くの教員が「道德科」の授業において、子どもの「自尊感情」や「自己肯定感」の育成を重視していることも明らかになった。ここでは、こうした「自尊感情」や「自己肯定感」を、“自己を受容できる力”“自身をいたわる力”という観点から、母性性の中に含めて考察した。以下、「自尊感情」と「自己肯定感」を一括りにして、その具体例を示しておきたい。

まず20代女性教員では、「自分を大切にできなければ、人を大切にできないことを自覚する」（自尊感情）、30代男性教員では「自分には素晴らしいところがあることを自覚させる」（自己肯定感）、50代女性教員では、「自分に対する肯定感を育む」（自己肯定感）、60代女性教員では、「個を確立することの大切さを自覚する」「自分自身の生命を大切にする」（自尊感情）等の意見が出された。こうした一連の結果の背景には、多くの教員が今日の子どもたちの自尊感情や自己肯定感の低さを憂慮していることが考えられる。

（3）男性教員に特徴的な父性原理

今回の調査結果で得られた今ひとつの特徴として、男性教員のすべての年代と、20代、30代の女性教員で、「善悪の判断」や「規範意識」「集団での規律」といった「ルールの順守」について重視している傾向が顕著に認められたことがあげられる。

具体的には、20代男性教員の場合、「自律によって善悪の判断をおこなうことが重要である」「全員が規律を守り、生活できないと他人を思いやれない」等の考えが、30代男性教員では、「善い悪いがわからないといけない」「善悪の判断をつけることで相手を傷つけない」、40代男性教員では、「自律がまず何よりも大切」「我慢すること」等の意見が、50代女性教員では「自分の価値判断で適切な言動がとれること」「すべての人や事柄を公平に見ること」等の考えが強く見られる傾向にあった。とりわけ、60代の年配男性教員では、『「ならぬものはならぬ」といった絶対的な考えを教えることが不可欠』『「悪いことは悪い」と判断し、行動できる」力を育むことを重視していることがより顕著に認められた。これらの一連の結果から、男性教員の多くが、“父性原理”に根ざした道德性を重視していることが読み取れる。

なお、こうした年代以外の教員では、前述したように40代の中堅女性教員で、道

徳科の授業に際して、「他者との関わり」をとりわけ重視しており、加えて「生命の尊厳」という点に重きを置いた回答も目立った。とりわけ、50代、60代の女性教員では共に、「“自分自身”や“他者”の尊重」という点を重視する回答が多く見られた。既に触れてきたように、男性教員では、すべての年代において「ルールの順守」といった“父性原理”に根ざした回答理由が見られたのに対して、女性教員では、授業で重視する内容として、年代が上がるに伴い、「ルールの順守」から「他者の存在や生命の尊重」、そして「自他ともに尊重する」といった視点を重視する傾向へと次第に変化しつつあることが示唆された。

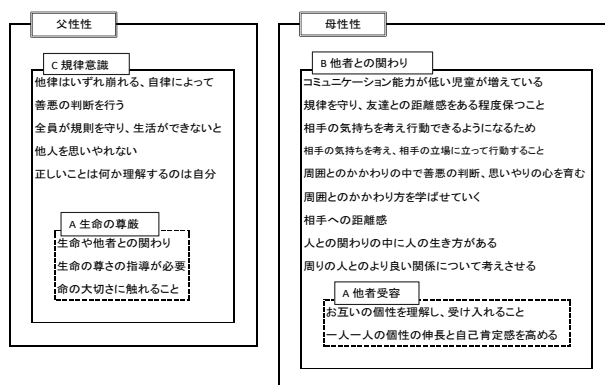


図 1 20 代男性教員の重点項目に関する意識 (24 人)

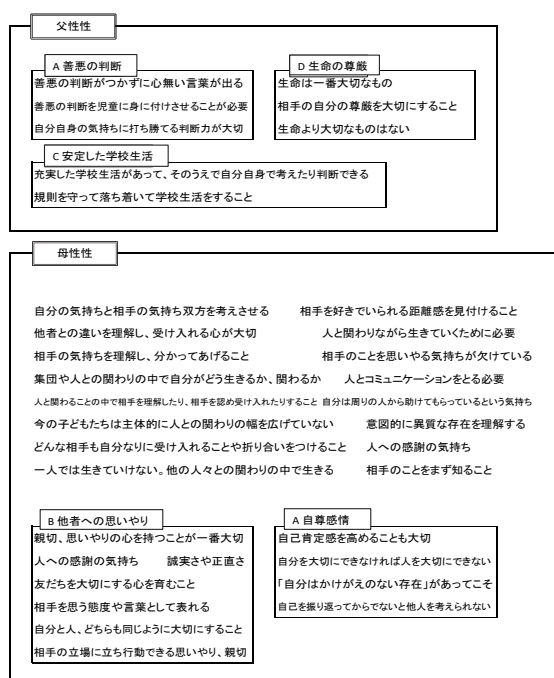


図 2 20 代女性教員の重点項目に関する意識 (45 人)

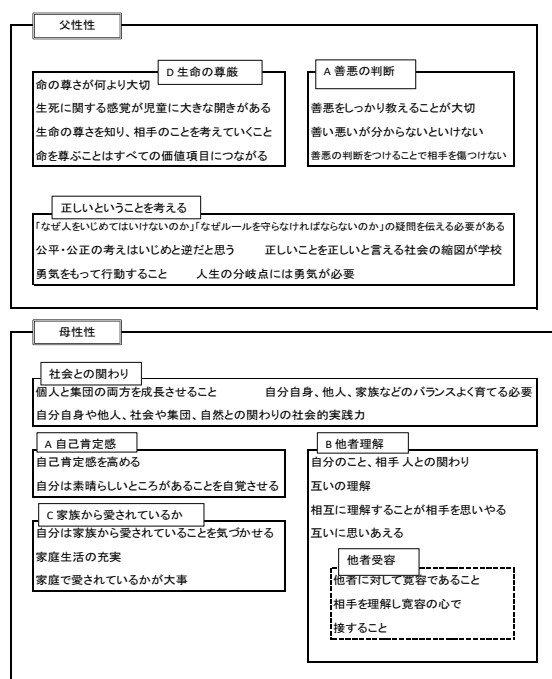


図 3 30 代男性教員の重点項目に関する意識(45 人)

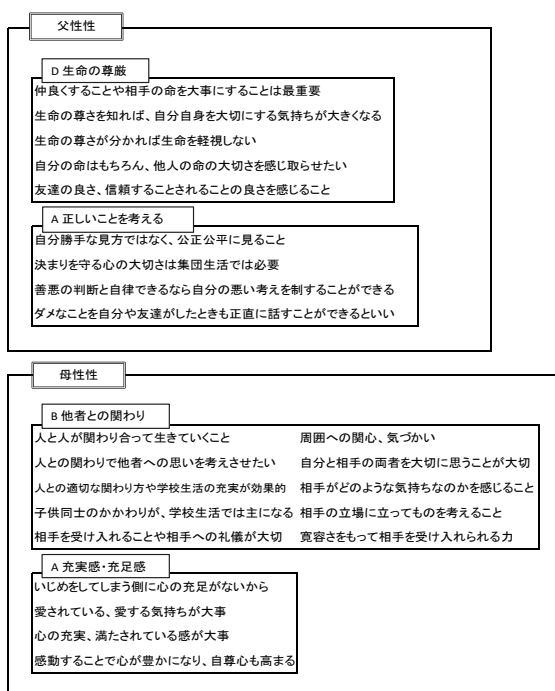


図 4 30 代女性教員の重点項目に関する意識(33 人)

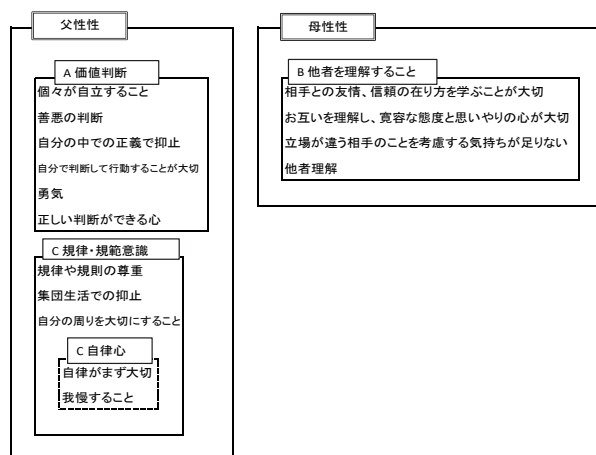


図 5 40代男性教員の重点項目に関する意識(21人)

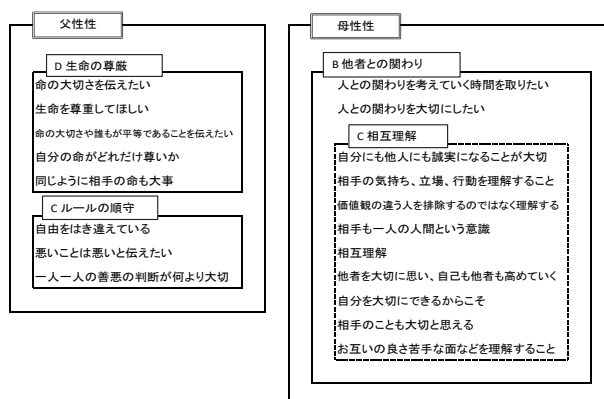


図 6 40 代女性教員の重点項目に関する意識 (28 人)

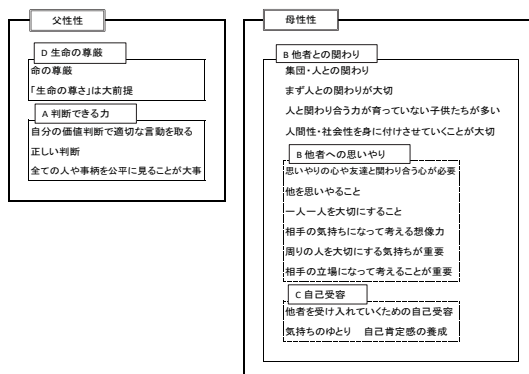


図 7 50 代男性教員の重点項目に関する意識 (23 人)

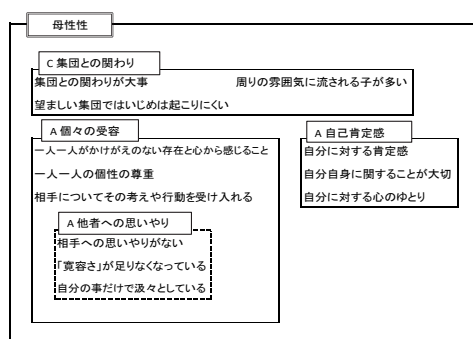


図 8 50 代女性教員の重点項目に関する意識（22 人）

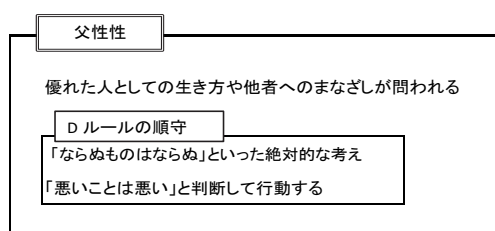


図 9 60 代男性教員の重点項目に関する意識（3 人）

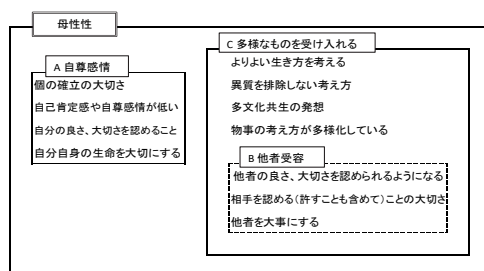


図 10 60 代女性教員の重点項目に関する意識（3 人）

4 考 察

ここで改めて、W市の小学校教員を対象にしておこなった研究結果（KJ法による質的分析）から浮き彫りになった、いじめ問題の対応と道徳科の内容項目に関する教師の意識について、観点別に振り返っておきたい。

観点「A 主として自分自身との関わり」で示された道徳科「内容項目」は、「善悪の判断」「正しいことを考える」「自律」「自尊感情」「自己肯定感」「自己受容」「充実感・充足感」「我慢」「判断できる力」である。本研究結果では、これらの「A」の観点のうち、いじめ問題への対応等の上から、とりわけ、多くの教員が重視したのは、「自尊感情」と「自己肯定感」であった。こうした結果は、多くの教員が、今日の子どもたちの自尊感情や自己肯定感の低さを憂慮していることを裏付けるものであろう。

観点「B 主として人との関わり」で示された道徳科の「内容項目」は、「他者理解」「他者受容」「他者への思いやり」である。本研究結果では、これらの「B」の内容のうち、いじめ問題の対応等の観点の上から、とりわけ、多くの教員が重視する内容として、母性性としての「他者への思いやり」、そして「他者との関わり」があがった。母性原理の特徴は、「包み込む」「抱きかかえる」という点にあるが、今回の結果を通して、多くの教員が年齢を問わず、いじめ問題を克服していくための重要な手立てとして、こうした他者愛や愛他心を育む授業を「道徳科」に求めていることがうかがえる。

観点「C 主として集団や社会との関わり」では、「ルールの順守」「規律・規範意識」「安定した学校生活」「家族から愛されている」「多様なものを受け入れる」があげられた。

今回の結果の特徴的な傾向は、いじめ抑止の視点から、男性教員のすべての年代と20代、30代の女性教員で、「善悪の判断」や「規範意識」「集団での規律」などの「ルールの順守」を重視していることであろう。男性教員の多くが、授業においても、「悪いことは悪い」、「ならぬものはならぬ」といった父性原理に根ざした道徳性を重視していることがわかる。

また、観点「D 主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関する事」では、多くの教員が、「生命の尊厳」をいじめ抑止との関連の上で重視していることが明らかになった。「生命の尊厳」を重視する傾向は、20代女性教員、30代女性教員、30代男性教員、40代男性教員、50代女性教員でいずれも顕著に認められた。

上記の分析の結果をふまえつつ、観点Aの中で重視された「自己肯定感（自尊感情）」、観点Bで重視された「他者への思いやり」、観点Cの中で重視された「ルールの順守」、そして、観点Dで重視された「生命の尊厳」の計4つの内容項目をもとに、児童のいじめ問題の対応等の観点から、道徳性の相互作用が図られるよう、以下の

1 ～ 5 つの活用例を示しておきたい。

1 分析結果を活かした道德教育の全体計画の活用例

全体計画の意義は、「小学校学習指導要領解説 総則編」において「人格の形成及び国家、社会の形成者として必要な資質を場として学校の特質や実態及び課題」に対応した道德的展開や「学校における道德教育の重点目標を明確にして推進する」ことを明示するとともに、全体計画の内容としては、基本的把握事項の中に「学校や地域社会の実態と課題、教職員や保護者の願い」などを考慮することが明示されている¹⁴⁾。

○道德教育全体計画の活用例

(1) 学校教育目標

人権尊重の精神に基づき、これらの社会に主体的に対応し、国際社会に貢献できる、心身ともに健康で人間性豊かな児童の育成を目指す。この目標を達成するために以下のような児童像を設定する。

○考える子 ◎思いやりのある子 ○元気な子 ◎ルールを守る子(◎印は重点項目)

(2) 学校の道德教育の目標

自らの課題をもって生活を切り開き、友達との関わりをもとに互いに尊重し、いじめのない学校生活を向上させようとする心豊かな児童の育成を目指して、以下の項目を重点とする。

①生命の尊厳を重視し、いじめのない健康で安全に気をつける子ども

②善悪の判断をもって、自分と異なる意見や立場を尊重する子ども

③ルールをよく守り、よく考えて行動し、規律ある生活をする子ども

(3) 道德科の目標

①自他の生命の尊厳を重視し、いじめのない健康で安全に学校生活が送れるようにする。

②自ら善悪を考え、友達の意見をよく聞いて、正しく判断し実践できる態度を養う。

③きまりを守り、差別や偏見をもたず、友達への思いやりをもって行動できるようにする。

○道德教育全体計画をもとにした道德の年間指導計画により、学級の一人一人の児童の道德的判断力を高め、検定の教科書及び指定の道德教育教材集を活用しながら、道德的心情を豊かにし、道德的態度と実践意欲の向上を図ることによって道德的实践力を育成する。

○各教科や特別活動で行われる道德教育を明確化し、補充・深化・統合を図る。

(4) 各学年の内容項目の指導の重点

①低学年

○よいことや悪いことを区別し、よいと思うことを進んで行う。[A 善悪の判断、自律]

○幼い人や高齢者など身近な人に思いやりの心で接し親切にする。[B 親切、思いやり]

○生きることを喜び、生命を大切にする。[D 生命の尊さ]

②中学年

○正しいと判断したことは、自信をもって行う。[A 善悪の判断、自律、自由と責任]

○相手のことを思いやり、進んで親切にする。[B 親切、思いやり]

○約束や社会のきまりを守り、公德心をもつ。[C 規則の尊重]

③高学年

○誰に対しても思いやりの心もち、相手の立場に立って親切にする。[B 親切、思いやり]

○公德心をもって法やきまりを守り(中略)、協力して責任を果たす。[C 規則の尊重]

○生命がかけがえのないものであることを知り自他の生命を尊重する。[D 生命の尊さ]

上記の学校の道徳教育の目標、道徳科の目標、各学年の内容項目の指導の重点を生かしながら、いじめ問題への対応等から学校の実態や児童の実態、教師や保護者、地域の住民の願いを基にして道徳教育全体計画に適切に配置したい。

2 分析結果を活かした道徳科の年間指導計画の活用例

○道徳科の各学年の年間指導計画 35 時間（1 年は 34 時間）のうち、重視すべき A ～ D までの 4 つの観点の内容項目を多く配置したい。

○年間指導計画の活用例

第 1・2 学年は 19 内容項目（時間）+ [A 善悪の判断、自律、自由と責任] 2 時間 + [A 個性の伸長] 2 時間 + [B 親切、思いやり] 2 時間 + [B 友情、信頼] 2 時間 + [C 規則の尊重] 2 時間 + [C 公正公平、社会正義] 2 時間 + [D 生命の尊さ] 2 時間 + [D 自然愛護] 2 時間 = 35 時間

第 3・4 学年は 19 内容項目（時間）+ [A 善悪の判断、自律、自由と責任] 2 時間 + [A 個性の伸長] 2 時間 + [B 親切、思いやり] 2 時間 + [B 相互理解、寛容] 2 時間 + [C 規則の尊重] 2 時間 + [C 公正公平、社会正義] 2 時間 + [D 生命の尊さ] 2 時間 + [D よりよく生きる喜び] 2 時間 = 35 時間

第 5・6 学年は 19 内容項目（時間）+ [A 善悪の判断、自律、自由と責任] 2 時間 + [A 希望と勇気、努力と強い意志] 2 時間 + [B 親切、思いやり] 2 時間 + [B 相互理解、寛容] 2 時間 + [C 規則の尊重] 2 時間 + [C 公正公平、社会正義] 2 時間 + [D 生命の尊さ] 2 時間 + [D よりよく生きる喜び] 2 時間 = 35 時間

上記の内容項目を生かし、いじめ問題への対応等から学校の実態や児童の実態、教師や保護者、地域住民の願いを基に、A ～ D までの 4 つの観点の内容項目を適切に

配置する。

3 分析結果を活かした道德性の評価

学習指導要領の「第3章 特別の教科 道德」の「第3 指導計画の作成と内容の取り扱い」の4において、①児童の学習状況や道德性に係る成長の様子を継続的に把握し、指導に生かすよう努める必要がある。②数値などによる評価は行わないものとする。また、「個々の内容項目ごとではなく、大きくりのまとまりを踏まえた評価」を求めている。つまり、道德性の評価は、「個性の伸長」「友情、信頼」「相互理解、寛容」など、内容項目一つひとつについて評価するものではないということである¹⁵⁾。

指導方法の評価の観点としては、例えば、自分との関わりで考え、自己の生き方についての考えが深められるものであるか。道德的価値についての理解を深めるための方法は、児童の実態や発達段階にふさわしいものであったかなど、学んだことや気づいたことなどが挙げられる。これらの評価としては、問題の課題に取り組ませることによって評価するパフォーマンス評価や、学習の過程で生まれた作品などを時系列で計画的に収集・蓄積した資料集を基に評価するポートフォリオ評価など、児童の変容や成長に関する評価が求められる。

いじめ問題への対応の観点から分析結果を活かした道德性の評価を例示するならば、

- A 主として自分自身との関わりとしては、いじめ問題の対応等の観点から、「自分との関わりから考え、自他をともに尊重し、自尊感情が高められたか」
- B 主として人との関わりから、他者との関係性としては、「他者との関わりで、他者を理解し、他者への思いやりや感謝の気持ち深められたか」
- C 主として集団や社会との関わりから、集団との関係性として、「約束やきまりの意義を理解し、多様なものを受け入れ、安定した学校生活が過ごせるようになったか」
- D 主として生命や自然、崇高なものとの関わりとしては、「生命のつながりの中にあるかけがえのないものであることを理解し、生命の尊厳の大切さを深めることができたか」

などが考えられる。いじめ問題への対応の観点から、児童の変容や成長に関わるエピソードを蓄積するとともに、児童による自己評価や相互評価を活用していくことが重要である。

4 分析結果を活かしたいじめ防止教育全体計画の活用例

○生活指導計画のうち安全教育指導計画の活用例

いじめ防止教育全体計画作成のための生活指導計画のうち安全教育指導計画の活用例を、小学校のいじめに関するA～Dの観点ごとに分類し、例示したい。

生活指導全体計画では、生活安全、交通安全、災害安全の取組で考慮したいこととして、

A：自他ともに尊重

- ・通学路の意味を知り、通学途上における安全な歩行について知る。
- ・上級生の自覚をもち、登下校の安全に心がけ、共に下級生の世話をする。
- ・校内外の遊具の正しい使用について知る。
- ・雨の日、風の日、の危険と安全な服装、持ち物の工夫をする。
- ・誘導なしで身の安全を守るための行動を取る。
- ・冬の日の休み時間や放課後のけがの防止に努める。
- ・遮断機のある踏切、ない踏切の渡り方について知る。
- ・校区内の危険な場所を知り、安全な対応をする。

B 他者理解

- ・飛び出しの危険を知り、車道へ出る時の一時停止と安全確認をする習慣を身に付ける。
- ・「いかのおすし」（いかない、のらない、おおきな声で呼ぶ、すぐ逃げる、しらせる）の確認をし、不審者への対応をする。
- ・公共の乗り物の安全な乗り方、降り方をする。
- ・雨の日のドライバーから見た注意事項を確認し、安全な雨の日の歩き方をする。
- ・自転車事故の被害者、加害者にならないための対応をする。

C ルールの順守

- ・学校のルールを知り、危険を予測して行動を選ぶ。
- ・通学路の標識を一人一人が確認をし、安全に歩行する。
- ・プールでのルールを守り、安全に気を付けることを知る。

D 生命の尊厳

- ・水泳等における事故防止に努め、自らの命を守る。
- ・通学路を守り、安全な歩行について理解し、自らの命を守る。
- ・火災発生時の身を守るための行動をとり、自らの命を大切にする。
- ・地震の災害に対応できる避難体制を取り、自らの命を守る。

上記のそれぞれの安全に関する項目をもとに、いじめ防止の対応等との関連を図りながら、学校や地域の実態を考慮し、時期・日時・内容等を低学年、中学年、高学年ごとにいじめ防止教育全体計画に位置付け、保護者・地域にも周知徹底を図ることが重要であろう。

5 いじめ問題への対応の観点から分析結果を活かした小学校におけるいじめ防止基本方針策定の基本認識と考え方に関する活用例

G 小学校における「いじめ防止基本方針」をもとに、筆者が基本的認識と考え方

基づいて A～D の観点をもとに、以下のように整理した。

(1) いじめの基本的認識

A：自他ともに尊重

- ・いじめは、人権侵害であり、人として決して許されない行為である。
- ・「いじめは人間として絶対に許されない」という認識をもたせる。
- ・いじめられている児童は徹底して守り通し、いじめによって被る不利益がないようにする。

B：他者理解

- ・いじめは、学校、家庭、地域社会が一体となって取り組む問題である。
- ・いじめは、教師が人としての手本を示し、きちんと指導していくことが問われている。

C：ルールの順守

- ・いじめは、その防止のルールを徹底し、ルールを守らない行為によっては、暴行、恐喝、強要等の犯罪として扱われる。

D：生命の尊厳

- ・いじめは、いじめを受けた児童の生命の尊厳及び人権を脅かす重大な問題であることを理解する。

(2) いじめ問題への基本的な考え方

学校は、「いじめ対策委員会」を設置し、校長、副校長、生活指導主任、特別支援教育コーディネーター、特別支援教室主任、当該学級担任、スクールカウンセラー、特別支援教室専門員及び校長が指名した者、及び PTA 会長、学校評議員、民生児童員等を招集し、校内組織を構成する。ここでは G 小学校のいじめ問題への基本的な考え方について、筆者が A～D の観点をもとに整理した。

A：自他ともに尊重

- 学校は、道徳科の時間、学級活動、児童会活動による自主的な取組を通して、児童に「いじめは絶対に許されない」ことを自覚させ、行動するよう促す。
- 学校は、いじめに関する情報を教員や保護者等に伝えた児童など、いじめ防止に向け勇気をもって行動した児童を守り、また児童会活動における児童の主体的な取組を支援する。
- 学校は、児童及び保護者を対象としたいじめ防止のための、ふれあい「いじめ防止強化」月間への取組、学校朝会における校長講話、学校便り等の啓発活動を推進する。

B：他者理解

- 学校は、「いじめ防止教育プログラム」をもとに、いじめに関する情報やいじめの兆候を確実に受け止め、いじめられた児童が安心して学校生活を送ることができるよう保護者等とも連携を強化し、いじめられた児童を組織的に守るようにする。
- 学校は、いじめの未然防止、早期発見・早期対応を図るために、教職員にいじめを

察知し、的確に指導できる力を身に付けさせ、組織的な取組を迅速に行い、いじめの解決を図る。

C：ルールの順守

○保護者は、児童がいじめを行うことがないように、学校が策定したいじめ防止のルールをもとに話し合い、児童にいじめは許されない行為であることを十分理解させるとともに、規範意識を養うよう指導に努める。

○学校、保護者、地域住民及び事業者は、学校の「いじめ防止教育プログラム」をもとに、いじめ防止のルールを共有し、連絡、相談を密にし連携協力していじめ防止等に取り組む。

D：生命の尊厳

○学校は、児童の生命の尊厳を守るためにも、道徳科の時間を要とした教育活動全体で行う道徳教育（生命尊重、規範意識、思いやりを重点）や人権教育を一層充実させる。

○学校は、児童の生命に及ぶようないじめの重大事態が発生した場合、当該重大事態に係る事実関係を明確にするための緊急の調査組織を設置し、校長を責任者として教育委員会指導主事、副校長、主幹教諭、生活指導主任、通級指導主任、及び教育相談員、警察等の関係機関と連携し、速やかに対策を講じる。

上記の A から D の 4 つの観点をもとに、学校は教育委員会と連携して、「未然防止」「早期発見」「早期対応」「重大事態への対処」の 4 つの段階に応じて、いじめ防止等に向けた効果的な対策を講じていくことが重要である。

参考・引用文献

- 1) 文部科学省 2017「小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」平成 29 年 7 月 p3
- 2) 読売新聞 2017「いじめ最多 32 万件」2017 年 10 月 27 日付 朝刊
- 3) 文部科学省 2013「いじめ防止対策推進法」第 28 条 2013 年 6 月
- 4) 鈎 治雄 2000『改定版・特別活動』創価大学出版会 p30-37
- 5) 教育再生実行会議 2015「道徳教育の抜本的改善・充実『道徳の時間の課題例』」平成 27 年 3 月
- 6) 文部科学省 2017 前掲 p3
- 7) 文部科学省 2017 前掲 p.46
- 8) 文部科学省 2017 前掲 p.50
- 9) 文部科学省 2017 前掲 p.3
- 10) 文部科学省 2017 前掲 p.46
- 11) 東京都教育委員会 2017「平成 30-31 年度使用 教科書調査研究資料（小学校）」

p43-50

- 12) 田村直美他「特集 いじめを乗り越える道徳授業づくり」明治図書 1997 年 7 月

pp104-108

- 13) 川喜田二郎『発想法』中公新書 1970 年

- 14) 文部科学省 2017 前掲 pp26-27

- 15) 文部科学省 2017 前掲 pp65-67

Study on Prevention of School Bullying and Items of Moral Education

— Primary school teachers' perspectives —

**Kenichi TANAKA Masayuki MIZUNO Hideo KATO
Haruo MAGARI**

Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT) announced that the number of reported bullying incidence in 2017, was the largest ever, (which increased by 91235 compared to 2016). School bullying has been one of the critical issues in school education, and it must be solved by an entire society. This study focused on prevention of bullying and key items of teaching in moral education.

In the study, school teachers were asked to choose 7 items from 22 key items of “Dotoku (moral education)”, which were described in the national curriculum guideline in 2018 as mechanisms to prevent school bullying. In total 246 (116 male and 130 female) primary school teachers from Tokyo, participated in the study; investigations were carried out in October 2016. The study used KJ method to analyze teachers' free descriptive answers which were related to their reasons to choose the key items.

The results showed that participants in all generations (from 20s to 60s) had a tendency to choose “respecting oneself and others”, “understanding others”, “keeping rules”, and “dignity of life” as key items. These answers correspond to the key areas of curriculum guidelines, which was described in the national curriculum guidelines for moral education (2017 Edition). For example, the area A “relation to oneself” corresponds to “respecting oneself and others”, the area B “relation to others” corresponds to “understanding others”, the area C “relation to group and society” corresponds to “keeping rules”, and the area D “relation to life, nature and the sublime” corresponds to “dignity of life”.

Considering these four key areas of the curriculum guidelines and its items, the authors made some recommendations on anti-bullying education in terms of an overall plan of moral education, an annual guidance plan of moral education, an assessment of moral education, and anti-bullying education.